



明治学院大学機関リポジトリ  
<http://repository.meijigakuin.ac.jp/>

Title	戦いを超えて 宣教師 Andrew N. Nelson の生涯と働き
Author(s)	中井, 純子
Citation	明治学院大学キリスト教研究所紀要, 47: 193-226
Issue Date	2015-01-31
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10723/2327">http://hdl.handle.net/10723/2327</a>
Rights	

## 戦いを超えて

—— 宣教師 Andrew N. Nelson の生涯と働き ——

中 井 純 子

### はじめに

第一次世界大戦中に、米合衆国の宣教師として来日し、第二次世界大戦の戦中、戦後に、類稀な働きをしたアンドリュー N. ネルソン (Andrew N. Nelson) の生涯は、後にNHKのTV番組「私の秘密」でも紹介された「事実は小説よりも奇なり」を地で行く経験の連続であった。しかし、この事実は、一般にも、学界でも殆ど知られていない。本稿の目的は、このインフォメーションギャップを埋め、親子二代宣教師アンドリュー N. ネルソンとその子息リチャード A. ネルソン (Richard A. Nelson) の働きに関する事実を記録しておくことにある。

『ネルソンの漢英辞典』の著者 A. N. ネルソンは、その言語学的才能のゆえに、第二次世界大戦の戦中、戦後を通じて、本人の想像もしなかった多岐に亘る分野で、顕著な働きをすることになる。1918年、米国のセブンスデー・アドベンチスト (SDA) 教団の宣教師として来日したネルソンは、まず教育活動に献身し、1926年千葉に創立された日本三育学院の院長となる。その前年、1925年にSabbatical休暇で帰米したネルソンは、日本の寺に関するPhD研究をワシントン大学に登録し、宣教の傍ら研究を続け、1938年には、ワシントン大学院から日本

の宗教学で博士号を取得した。第二次世界大戦中には、米国陸軍省の召請に応じ、ワシントンのIntelligence Office情報部で医学用語、技術的用語の日英辞書編纂に従事する。戦後は連合国軍最高司令官総司令部（SCAP/GHQ）の通訳官として軍服に身を包み再来日。1946年には、民間情報教育局（CIE）の宗教課スタッフとして、弾圧されたキリスト教会などの調査を行う一方、信教の自由を奨励する連合国軍最高司令官指令の文面作成にバンス宗教課長を補佐して参画した。

1947年1月に、Phillipine Union College（PUC）の学長に招聘されると、半年後の1947年8月にはフィリピンにおける日本のB、C級戦犯の裁判が始まり、ネルソンは、日本人戦犯に監獄伝道を行い、絞首刑等を宣告されていた多くの魂を救いに導く。さらに1958年にはミンダナオ島に、恵まれた自然環境を生かした、自らの教育理念を実現するカレッジ、Mountain View College（MVC）を創立した。この多様な活動に従事する傍ら、ネルソンは常に漢字カードを身から離さず、1961年に宣教師活動から引退し、再び日本に戻ると、多くの時間を地道な漢字学習に投じ、1962年に『ネルソンの漢英辞典』を出版、この辞書は、その改訂版を含めて、現在に至るまで、世界中の日本学や中国学研究に勤しむ英語話者に愛用されている。この多彩な働きと歩みを、本稿では、ほぼ時系列に沿って辿ってみたい。

第一次資料としては、米国国立公文書館National Archives and Records Administration（NARA）に保存されている連合国軍最高司令官総司令部（SCAP/GHQ）の資料の中に、非常に限られてはいるが、ネルソンの働きに関連した資料がある。NARAにはフィリピンのBC級戦犯裁判記録の一部も保存されている。更に、外務省編『終戦史録』、下村海南著『終戦秘史』を用いて、事実の解明を試みたい。第二次資料として、ネルソンの後継者として宗教調査班責任者を務めたWilliam P. Woodardの、民間情報教育局（CIE）に焦点を当てた *The*

*Allied Occupation of Japan, 1945-1952 and Japanese Religions* の和訳である『天皇と神道』、ネルソンの英文伝記Dorothy Minchin-Comm, Dorothy Nelson-Oster 共著 *An Ordered Life - The Andrew N. Nelson Story* 及び永井均著『フィリピンB, C級戦犯裁判』を主に用いた。さらに父親のAndrew N. Nelsonとワシントンで起居を共にし、やはり連合軍の特殊任務についていた長男のRichard A. Nelsonへの取材を行い、事実の把握、検証に努めた。日本で生まれ、江戸っ子を自称し、米国で医師の訓練と教育を受け、戦後は日本で、日本国医師国家試験に合格した医師として働き、現在カリフォルニアのロマリンド在住のリチャード・ネルソンは、2013年には94歳であったが、電話で取材への協力を求めると、「わたしの日本語は50年も使っていないので、錆びついています、（インタビューは）錆び落としにいいでしょう」と即座に応じ、彼の日本語とともに健在であることを示された。また、フィリピンの監獄生活から解放され、帰還した市村勲元大尉の夫人市村昭子さんと長女の佐野春子さんに貴重な第一次資料の提供と取材へのご協力をいただいた。心からお礼を申し上げる。A. N. Nelsonの友人Luis Venden博士は、ネルソン自身から贈られた『ネルソンの最新漢英辞典』を本研究に資するようにと無期限で貸して下さった。感謝にたえない。

## 生い立ち

Andrew Nathaniel Nelsonは、スウェーデンからの移民、Andrew A. NelsonとGustava Nelsonの長子として1893年12月23日に、モンタナ州グレイトフォールに生まれた。十代になるまでには、有益な働きをして周囲に役立つことを学んでいた。ワシントン州Walla Walla Universityで教育学を修め、図書館学、牧会の訓練とギリシャ語、及び

文学を学ぶ。一年の時にSDA教会で受浸した。ある日、町でホームレスに行き逢い、ダイム硬貨をねだられたネルソンは、昼食用にもっていた一枚のダイム硬貨を手渡し、その日自分自身は、昼食を抜いたといわれている。卒業後はシアトルの小学校の校長や西ワシントン州で教区牧師を経験するが、タイムマネジメントの重要性を学び、また、他人から言われたくないようなことを、他人について話すことはいっさいしないことを自らに戒めるなど、自律した、理性的で、計画性に富む性格であった。

## 日本三育学院の時代

日本伝道は、1918年3月14日に結婚したVera Shoffと二人で参加したサンフランシスコにおけるSDA教団世界総会で、当時のSDA日本連合伝道部会の責任者B. P. Hoffmannから日本伝道を勧められたことで緒に就く。日本伝道への決心はその世界総会のキャンプミーティングで固まり、ネルソン夫妻はその年、1918年10月には海路、横浜に到着し、当時、日本SDA教会<sup>(1)</sup>本部のあった荻窪村の天沼の新居に落ち着いた。

日本は第一次世界大戦への参加で繁栄を享受し、帝国主義列強に連なっていた。しかし、その反面、異常景気による物価の高騰と賃金の実質低下で、大衆は深刻な生活難に陥っていた。夏目漱石が「日本ほど借金をこしらえて、貧乏震いをしている国はありゃしない」<sup>(2)</sup>と、日露戦争の勝利で、間口だけ広くして一等国の仲間入りをしたものの、その実、国民生活や文化の面では奥行きのない、実力の伴わない国だと痛烈な批判をしていると井上清は指摘する。<sup>(3)</sup> 1918年春から米価が暴騰を続け、米騒動が勃発し、重税、高い小作料、低賃金に喘ぐ農民や労働者が各地で不満を爆発させていた。

荻窪の天沼あたりは未開発で、薄野と武蔵野の田園や林が続いてい

た。その中に建った「洋館」と外国人は、村人の目に次のように映った。

大正3（1914）年、四面道の3000坪（1ヘクタール弱）の土地が囲いで仕切られ、一面に杉並最初の煉瓦造り2階建の西洋館が建設された。そして、青い目をした何人かの外国人が日本人とともに住み始めたから、西洋人を見たこともなかった村人は仰天した。これはキリスト新教セブンスデー・アドベンチスト教団の牧師さんたちで、建物は印刷所と教会を兼ねた本部のほか、彼らの住宅があった。自家発電の装置を備えていて、夜は洋館の窓々から漏れる電灯の光がきらきらと輝き、薄暗いランプの明りしか知らない村人の目に、お伽の館のように妖しく美しく映った。<sup>(4)</sup>

尖塔のある天沼教会の古風な建物にアンドリューは、心の安らぎを感じたようである。

1919年に小、中、高校を備えた天沼学院が開設され、SDAの教育理念一頭と心と体のバランスのとれた成育を促すキリスト教主義の三育教育が実践された。更に「豊かな自然環境の下に理想的な三育教育を実施しようという教育観深化のあらわれとして」千葉県楡葉に、1926年に日本三育学院が設立された。天沼学院の男子部を千葉に移し、女子部は日本三育女学院として荻窪に残り、ネルソンは、その両校の院長となる。ミッションスクール日本三育女学院は、「区内最初の女学校で、駅をつかってかよう良家の子女で通りは華やかな賑わいを見せた」<sup>(5)</sup> という。

ネルソンの見出した日本は、「住み心地のよい土地で、そこでの生活は安全で、健全で、幸福」だった。人びとは、「驚くべき美徳—正直、効率性、清潔、正確さ、親切、分け隔ての無い公平さ、礼儀を示していた。」<sup>(6)</sup>

しかし、日本での一年目にアンドリューは、フラストレーションを感じている。日本語習得のためにでかけた文書伝道で、日本語能力の限界のためにすぐにセールスポイントを売り込む言語表現が尽きてしまうのだ。「いったいつになったら、自由に日本語を話せるようになるのだ

ろう。」と彼は思った。が、ついにその時は訪れた。日本語学習2年目の終わりに、「神の助けで、もうすぐこの日本語という第三母国語を自在に操ることができるだろう」という感触をえた。

ネルソンは実践的で効率的に仕事をこなす宣教師であったが、その一面、学究的でもあった。日本に赴任して七年が経ち、Sabbatical休暇で一年間帰国した1925年にネルソンは、ワシントン大学で、PhD取得のために、日本の宗教に関する研究



Andrew N. Nelson

を始めた。日本で、教育者としての働きに献身しながら進めたこの研究は、日本が中国に全面戦争をしかけ、国内では国家総動員法を成立させた1938年の年末に、同大学からの博士号授与という形で実を結ぶ。研究の課題は、日本の宗教、特に寺の歴史と現状分析であり、題は、The Origin, History and Present Status of the Temples of Japanであった。この研究は、やがて、アンドリュー・ネルソンを特別の働きへと導いていくことになることを、ネルソンはこの時点では知る由もなかった。

1926年にネルソンが院長として帰任した日本三育学院は、日本の教育界に新しい風を吹き込んでいた。数回に亘り学院を訪れた「横浜高等工業専門学校教授（のち文部省社会局長）の水野常吉は、『日本ニ初メテ出現セル自治自営ノ学校』と題した書物を出版した」と千葉県立高校教諭の各務敬は記している。<sup>(7)</sup>

しかし、1929-30年の世界恐慌は日本にも波及し、経済的困難と、

朝鮮、中国の民族闘争の激化は日本の危機感を増大させた。関東軍の将校と参謀本部は1931年に満州事変を起こし「宣戦布告なき中国との戦争」に突入し、さらに1937年7月7日の支那事変で、日本は中国との全面戦争を開始した。<sup>(8)</sup>

戦況が厳しさを増すに従い、政府の国内統制も厳しさを増し、1939年に政府は宗教団体法を制定し、50の教会と5000人の信者をもつ組織でなければ、一宗派として認めないとした。教会合同の動きが加速化する中、ネルソンを最高責任者とする第七日基督再臨団と名称を変更していたSDA教団は、他教会との合同はしない方針を貫いた。その結果、地方教会は、各地域の都道府県に単立の宗教結社として登録せざるをえなかった。1940年にネルソンは上海に移動。1941年、日本政府は宣教師離日命令を出した。日中戦争は泥沼化し、経済的に逼迫した日本はついに南下政策をとり、その結果、1941年12月、帝国主義国として利害の対立する米合衆国との太平洋戦争へと突き進んだ。

## 米国政府の Research Specialist として

日米開戦が近づくと、上海で、SDAの極東支部全域の家庭教育機関の責任をもっていたネルソンは、アメリカのSDA世界総会本部から、急遽、帰国命令を受ける。次の船で上海を発ち、満州と日本に寄り、難局に備えて支援をし、帰国すると、待っていたのは、エマニュエルカレッジ学長のポストであった。しかし、太平洋戦争が始まると、米国政府の陸軍省からの召請が再三送られてきた。軍の仕事に就くことに躊躇したが、「いつも我々は陸軍に入隊した教会の青年のために政府に協力を求めているけれど、今、立場が逆になったのだ」という上司の言葉に背中を押され、真珠湾攻撃から3週間後に、ネルソンは召請に応じてワシントンへ赴いた。そこにはネルソンと同じく日本語のスキルが卓越し



ているという理由で選び出されたかつての宣教師仲間が集まっていた。彼らとのチームワークで、Research Specialist 調査専門官として、当時不足していた医学・技術関係のテクニカル用語を収録した日英辞書二冊の編纂に携わる。シリーズの一冊は、150,000 語を収めた *Japanese-English Technical Terms Dictionary* であった。

## 長男 リチャード・ネルソン (Richard A. Nelson) の特殊任務



94歳のRichard A. Nelson 2013年8月 ロマリ ندا自宅にて

Intelligence Departmentにもう一人推薦するようにとの要請を受けたアンドリュー・ネルソンが推挙したのは、長男のリチャード・ネルソンであった。1920年に日本で誕生し、戦時には25歳になっていたリチャードは医学部を目指していたが、徴兵を受け、やはり父親のいるワシントンで陸軍省のIntelligence Officerとしての特殊任務に就く。それは、Al Dwyerとともに、日本とベルリンの間で取り交わされる日本陸軍の暗号解読であった。リチャードは、暗号解読の仕事で、「一日中、クロスワードパズルをしているようだった」と形容している。

「アメリカは度々暗号を変えた。でも、日本は、戦争の最初から最後まで、暗号を変えなかった」とも言う。

ある日、DwyerとNelsonは、遂に日本軍の暗号解読に成功した。日本軍の真珠湾奇襲で始まった太平洋戦争において、米軍が日本軍の暗号を完全に解読していたことは、既に知られている。

長崎の原爆投下直後、暗号解読の夜勤に着いていたリチャード・ネルソンは、天皇陛下の降伏のメッセージを傍受する。彼は注意深く心を傾けた。

「この戦争に勝つ希望はない。わが国民のさらなる苦難を避けるために、連合軍に連絡をして和平を懇請せよ、どんな代価を払っても。」という言葉を解読した。

「なぜ（原爆を）？ これは降伏のメッセージだ！」

興奮で喉を詰まらせながら、上官に電話で報告する。「ついにきました。よい知らせが。」上官アウレル中佐はIntelligence Officeに急行し、リチャードとともに、内容を確認した上で、トルーマン大統領に報告した。<sup>(9)</sup>

当初、日本の指導者たちは、中立条約を結んでいたソ連の仲介による和平工作を進めようとした。しかし特使の派遣を申し込むなど、何度かの働きかけに対しても、ソ連からは生返事しか返って来なかった。<sup>(10)</sup> ソ連は日本に対して参戦する好機をうかがっていたのである。

東京大空襲が激しさを増す中、天皇陛下は、鈴木貫太郎首相を介して、スイスとスウェーデンを通して降伏のメッセージを送ることを決意した。リチャードが傍受したメッセージは、ベルンとストックホルムにそれぞれ駐在する日本国大使に宛てた天皇陛下の命令であった。日本のポツダム宣言受諾の意図は、米国へはスイス政府を經由して、英国へはスウェーデン政府を經由して打電されたことが『終戦秘史』で確認できる。<sup>(11)</sup>

## 戦時中の日本SDA教会の弾圧

終戦直後の日本には、どこにも避難することができずに、戦時中を日本で過ごした、ベルリンから来たドイツ人宣教師（SDA）ゲオルグ・デートリッヒ（Georg Dietrich）一家がいた。戦時中には、ナチのゲシュタポにスパイ容疑をかけられたために、ゲオルグは特別高等警察（特高）に逮捕され、Degree3の執拗な拷問を受けた。<sup>(12)</sup> 瀕死の状態で家に帰された時には、度重なる拷問のために体が反り返ってしまい、元には戻れなかったという。

終戦後、リチャード・ネルソンは、SCAP/GHQの通訳官として日本に赴任したが、その赴任の折に、デートリッヒ一家の経済的逼迫を心配したアメリカ在住のドイツ人親族から、その宣教師家族に渡してほしいと現金500ドルを預かった。当時としては、相当の金額である。ところが、日本に来たりチャードは、敗戦後日本のでこぼこ道をバイクで駆けまわる間に、腰のポケットに入れておいた財布ごと、そのお金をどこかに落としてしまった。「私は、その報告をそのドイツ人宣教師にしなければならなかったのです」とリチャードは言う。しかし、数日後、MPから呼び出しを受けたリチャードが警察に出頭すると、渡されたのは、落とした財布であった。それを拾った日本人が、そのまま手付けずに、警察に報告したものであった。敗戦後の日本社会の混乱の中で、「日本人の誠実さを知る心温まる経験」だったと、リチャードは、話してくれた。それは、戦争でも崩れていない日本の、もう一つの側面であった。

戦時中に迫害を受けたのは、このドイツ人アドベンチスト宣教師だけではなく。日本のSDA教会も、政府の徹底的な弾圧を受けた。1943年9月20日の早朝、北海道からパラオ諸島まで、日本の全SDA教会の牧師、主要な教役者、編集者、主な長老、43人が一斉検挙、投獄

され、4人の犠牲者を出した。日本三育学院は、閉鎖、接収、教団の出版機関、福音社は即時活動中止、医療機関の東京衛生病院も、日本医療営団に強制委譲された。SDA教会は、キリストの再臨を含む教理そのものが問題とされ、唯一神である神を礼拝し、天皇陛下を礼拝の対象とはせず、従って宮城遥拝をせず、第七日の安息日には勤労奉仕をしないために、反社会的と見なされた。教会の全財産は没収、売却され、<sup>(13)</sup> 再臨運動は壊滅的な打撃を受けた。

### 連合国軍最高司令官（SCAP）総司令部（GHQ） 民間情報教育局（CIE）宗教調査アナリストとして

1945年9月、敗戦後の日本に、アンドリュー・ネルソンはSCAP/GHQの軍属（中佐級の民間人）として降り立った。連合国軍最高司令官マッカーサー將軍は、統治に当たる日本政府との交渉を控えて、優れた通訳官を必要とした。Intelligence Office から選ばれた人材の中に、アンドリュー・ネルソンと、宣教師仲間で、後に教育調査アナリストとなるフランシス・ミラード（Francis Millard）、それにリチャード・ネルソンがいた。終戦後も引き続き軍服をつけることへの抵抗感はあったが、皆、極東へ戻りたい気持ちのほうが強かったという。

マッカーサーの占領政策は統合参謀本部より発せられたJCB1380/15という「日本の占領と支配のための降伏後初期の基本指令」に明記され、阿部美哉によれば、

マッカーサーの参謀長とそのスタッフたちは、JCB1380/15を受け取ると、これを実施するために、パラグラフごとに、占領軍総司令部の13の局に分配した。各局長は、割り当てられたパラグラフをさらに自分の配下の各課に分配し、課長は、さらに各係に分配した。この指令の文言は、総司令部の誰かに完全に割り当てられ、総司令部のスタッフは、同司令のどこかを

その「任務」として、その執行にあたった。<sup>(14)</sup>

占領政府の宗教政策は、基本的にポツダム宣言に拠っており、ポツダム宣言には信教の自由の確立が含まれていた。宗教に関して占領の主要な目標は次の3点であった。

- 1) 信教の自由の奨励と確立
- 2) 政教分離
- 3) 宗教の教理、実践、儀礼、儀式、祭典に見られる軍国主義や超国家主義の禁止。<sup>(15)</sup>

アンドリュー・ネルソンは当初は、枢機の通訳官であったが、後に、SCAP・総司令部（GHQ）民間情報教育局（CIE）の宗教調査アナリストとなる。

宗教課の課員の採用においては、候補者個人の信仰は問題にされなかった。採否の決定に際して考慮されたのは、「健全な判断力があるかどうか、すべての宗教の自由を確信しているかどうか、日本の宗教全般にたいする関心を持っているかどうか」であった。<sup>(16)</sup>

ここで、日本の宗教に関するネルソンのPhDが活かされた。

宗教課スタッフとしてのネルソンの任務は、第一に、マッカーサーの指令の文面作成者であるウィリアム・バンス（William K. Bunce）宗教課長を補佐し、「信教の自由」に関する指令を起草することであり、第二には、戦時中に宗教を理由として日本国政府より迫害を受けた宗教団体の調査を実施することであった。「彼らが作成した文書は、国家神道を廃止し、日本における宗教弾圧を終息させることになるのであった…信教の自由に関してアンドリュー・ネルソンの書いた条項は、新日本国憲法に組入れられた」とネルソンの伝記記者は記している。<sup>(17)</sup> この記述は、下記の二点によりその事実が裏付けられると思われる。

宣教師出身で、ネルソンの後任としてGHQ・民間情報教育局の宗教調査班の第二代の責任者となり、占領後は、国際宗教研究所長を務めた

William P. Woodardは、*The Allied Occupation of Japan 1945-1952 and Japanese Religions*, 阿部美哉訳『天皇と神道』において、占領政策とその遂行のプロセスを、民間情報教育局の宗教課に焦点を当てて明らかにしている。民間情報局の宗教の分野における任務に関して、1945年11月の宗教課の設置時には、その任務の第一に、次が挙げられている。

- (1) 信教の自由の確立と保全を促進し、かつ日本国民をして信教の自由を希求するよう助長すること<sup>(18)</sup>

各課の任務については、下記を明らかにしている。

各課は、全体政策の枠組みの中で、それぞれの担当専門分野について、

- (1) 日本国政府にたいして、連合国軍最高司令官の「指令」または連合国軍最高司令官「通達」、あるいは軽微な事項についての各省への「口頭指示」の形で伝達される重要な政策的ステートメントを起草すること…などをその任務としていた。<sup>(19)</sup>

従って、「信教の自由」の確立に向けての条項の起草は、宗教課の任務であった。

米国の国立公文書館（NARA）に、SCAP/GHQから日本政府に宛てたMemorandumとして、Subjectを「信教の自由」と「政教分離」とするDirective（指令）の草稿が保存されていた。その冒頭に「本指令は、次の指令にとって代わる」として1946年5月13日のCIE、同年11月13日のCIEの指令が挙げられている。本文書は、起草された指令の草案の文面に、上官のフィードバックが書き込まれたもので、同じ草案を基礎にした2種類のフィードバックが異なる手でそれぞれに記録されている二組の文書がある。そのうち一つは、WKBの署名が変更を指示した書き込みに添えられ、草稿をバンス（William K. Bunce）司令官が読み、“Delete”とか“Add”とかの意見を加えているのが見てとれる。ここに、総司令部から日本政府に宛てた「指令」が作成されていっ

たプロセスが窺える。<sup>(20)</sup>

最初に1. Policyの条項に

1. Freedom of worship and observance of all religions shall be guaranteed to all for the future.

とあり、続いて、カッコの中に関連する法令が挙げられているが、その中に、(Article 20, Const. of Japan)とあり、この条項が日本国憲法第20条に組み込まれていったことを示している。この事実は、「信教の自由に関してアンドリュー・ネルソンの書いた条項は、新日本国憲法に組み入れられた」というネルソンの伝記記者の言葉の信憑性を窺わせる。ネルソンがGHQを離れるのは、1946年5月と見られ、ネルソンの書いた草案は、1946年5月13日CIEの起草した指令に含まれていると考えられる。日本国憲法の制定は、1946年11月3日であり、第20条の冒頭は次の言葉である。

「信教の自由は、何人に対してもこれを保障する。」

ここには、上記Directiveの第一項が反映されている。

マッカーサーの占領政策については、キリスト教の価値観に基づく日本のリハビリテーション政策であったことが指摘されている。<sup>(21)</sup>それは、敗戦の辛酸を喫した日本国民の心にできた空白が北から侵攻してくる共産主義に満たされないうちに、民主主義に根ざした新国家の復興を、自らの足で立ち上がり、なすことを支援するというものであった。<sup>(22)</sup>

戦後の被占領期は、日本の一大変革期であった。新しい価値観が導入された。それはまた、日本におけるキリスト教ブーム著しい時期であり、それは占領開始時期から1949年までに、新旧教合わせて2000人のキリスト教宣教師が日本に送られている統計にも見てとれる。<sup>(23)</sup>

森本あんりは、「いつでも、キリスト教が盛んなのは、社会や文化が形成期にある地域である」と分析をしている。

このことは、日本の歴史を振り返ってみてもあてはまります。明治の初期

や戦後の復興期など、国家のしくみが大きく変わる時には、キリスト教の影響力が強くなっています<sup>(24)</sup>

確かに、明治初期と戦後の復興期には、この面で、並行現象が見られるようである。明治初期には、「信教の自由」を宣教師フルベッキが、明治新政府のお雇い外国人顧問として、「ブリーフスケッチ」に書いている。当時の日本には、「Liberty」という語の訳語がない」とフルベッキは本国のミッションに書き送っている。<sup>(25)</sup> 戦後初期の復興期には、占領政策の主要な目的として「信教の自由」の確立が重視され、バンスとA. N. ネルソンが「信教の自由」に関して、用意、作成した条項が新憲法に組込まれた。明治期には、天皇にご進講という形で、フルベッキが、内村鑑三が、山室軍平が、聖書研究をしている。戦後の占領期には、皇太子などが内村環から聖書研究を受けることを、天皇が許可されたという。<sup>(26)</sup>

GHQでのネルソンのもう一つの仕事は、ネルソンを先頭に Religion Research Unit 宗教調査班が実施した、戦時中に宗教を理由として迫害を受けた宗教団体に関するフィールド調査であった。その結果が Special Report として1946年2月にまとめられている。米国国立公文書館に保存される SCAP/GHQ 民間情報教育局 (CIE) の資料には、この調査の結果として、日本の主な宗教の成り立ちと現況に関する報告書や、戦時中に日本政府の弾圧を受けたホーリネス教会やセブンスデー・アドベンチスト教会迫害に関する Special Report が保存されている。ネルソンがこの宗教調査を担当していたことは、ホーリネス教会の宗教弾圧に関して、教会代表者と面接を実施していたことが、記録されていることにより明らかである。<sup>(27)</sup>

ネルソンの働きは、迫害の惨禍に苦しむ日本の宗教各派に深謝された。宗教調査班の researcher としても働いた日本 SDA 教会の梶山積牧師は、述べている。



マッカーサー司令部の日本における宗教と教育の分析、調査をする二つの重要なポストがSDA教会の宣教師にゆだねられたことは、全く不思議な主のみ摂理であった。両師とも調査の必要上、日本の宗教各派、各学校、各階層の責任者たちとの面接において示された懇篤な心づかいと、各要件に関連して生じる種々な嘆願に対して同情に満ちた配慮を払ったため、いたく当事者たちを感動させ、深い感謝の念をいだかせた。<sup>(28)</sup>

ネルソンが、宗教弾圧を受けた日本セブンスデー・アドベンチスト教会の戦前の最高責任者であったことは、SDA教会のみならず、宗教調査の仕事一般に大きなメリットであったのではないだろうか。「信教の自由」は、「宗教を理由とする迫害」の対極に位置する。後者の実体験は、「信教の自由」の意味を深く悟らせてくれたに違いない。

宗教調査のSpecial Reportが提出された1946年2月に、ネルソンは陸軍省より下記の推薦状を受けている。

#### War Department

#### Commendation to Dr. Andrew N. Nelson

For meritorious civilian service and outstanding performance of Duty.

For initiative in undertaking lexicographical projects designed to effect great saving of time for government agencies

For his brilliant organization and unflagging devotion to duty,

and

For his readiness to forget self in order to put his talents at the service of others.

26 February 1946.<sup>(29)</sup>

#### 陸軍省

#### アンドリュー・ネルソン博士への推薦状

民間人としての奉仕の功績と、任務の抜群の遂行に対して

## 戦いを超えて

政府各庁の大いなる時間節約を期してデザインした辞書編集プロジェクトにおける

イニシアティブに対して

優れた組織力と任務に対するやむことない献身に対して

そして

他人への奉仕のために自己を忘れて自らの才能を用いようとする準備態勢に対して。

1946年2月26日

## フィリピンにおけるB, C級戦犯への監獄伝道

1947年1月からA. N. ネルソンの働きの舞台は、マニラに移る。戦禍で荒廃したマニラでは、5年間占領日本軍の本部として使われ、荒れるに任せたPhillipine Union College (PUC)の学長としてその復興に携わった。フィリピンは1946年7月に米国から独立し、1947年8月1日には、フィリピンの軍事法廷で、日本のB, C級戦犯の裁判を開始した。New Billibid Prison (NBP) ニュービリビッド刑務所に収監された戦犯の慰問に誘われたネルソンは、日本人戦犯の惨状を目の当たりにして、本格的な監獄伝道を開始する。毎週土曜日の午後、PUCの米・比人教職員と学生を連れ、食料品や新鮮な果物を差し入れ、監獄内で流暢な日本語で多くの日本人のために聖書研究会を行った。フィリピンの監獄の戦犯死刑囚は、自分の犯した過去の罪過の一切を背負って、キリストが十字架上の死を遂げられたゆえに、自分の罪が赦され、自分が受け入れられていることを知り、どんなに心底からの慰めを与えられたことであろうか。福音の使者の果たした役割は大きい。この聖書研究会には、三十数名が参加していた。

当時、フィリピン人一般の日本人に対する憎悪は激しかった。1980年代に筆者がマニラを訪れた時、あるフィリピン人牧師が教えてくれた。「あそこに海に突き出ている岩があるでしょう。あの岩陰の洞穴に、

日本兵は鉄柵を設け、フィリピン人を投げ入れ、潮が満ちると、洞穴の中の人が溺死してしまうのにまかせ、潮が引くと、鉄柵を開け、溺死体を海に流したのです」と。こんな野蛮な暴虐を繰り返した日本人をフィリピン人は恨んでいた。しかし、ネルソンは野蛮ではない日本人も、キリスト者の日本人も知っていた。ために、激しい憎悪にさらされた日本人戦犯に対する神の許しと愛を伝える働きに、心あるフィリピン人キリスト者の中から共労者を見つけることが出来たのである。その結果、1949年10月29日に、19人がPUCキャンパス内のSDA教会で、かつて日本軍人の拷問を受けた人を含むフィリピン人キリスト者の祝福のなか、バプテスマを受けることができた。<sup>(30)</sup> フィリピンの主要新聞は、このニュースを大きく報道し、これはフィリピン社会に影響を与えた。フィリピン・キリスト教会連盟は、19人のうち13人を終身刑に減刑するようキリノ大統領に請願した。<sup>(31)</sup>

戦犯裁判の専門家で、特にフィリピンと対日戦犯裁判に詳しい永井均は『フィリピンBC級戦犯裁判』で対日戦犯裁判に対するフィリピン側の歴史背景、指導者の考え方や姿勢、一般大衆の心情などを、第一次資料に基づき、詳しく明らかにしている。それによると、フィリピン政府の戦犯裁判に関する方針は、マヌエル・ロハス独立初代大統領が公言したように、かつてフィリピン人に無差別に暴虐を加えた戦犯に対しても、国際法にもとづき、公正かつ道理に即して迅速に行うというものであった。対日戦犯裁判は、新生独立国家フィリピンの国家プロジェクトであり、若きフレッド・カストロ軍法務総監は、この戦犯裁判において、フィリピンが文明諸国で認められている原則、基準に沿って、正義を遂行する能力を有する国民であることを国際社会に示しえる貴重な機会であると考えた。また、東洋における唯一のキリスト教国として、戦犯裁判では、悪をなした者にこそ、許しと公正をもって当たる必要があるだと考えていた。<sup>(32)</sup> そのため「日本人戦犯には日本の費用負担で弁護

士と通訳がつけられ、弁護目的の証人召喚も許され、再審理の道も備えられた。』<sup>(33)</sup>

一方、フィリピン人一般は、日本人に対する復讐の念があり、一人一人の審理に時間を費やすより、フィリピン人一人の命に対して、日本人一人の命を持って報復しようとする向きもあり、無実の罪で死刑に処された例も多く見られた<sup>(34)</sup>。松崎秀一元憲兵中佐の調査によると、絞首刑を宣告された日本人戦犯の中に、無実と考えられた人は33人に上り、その無実の確率が高い方からA、B、Cの格付けがされている。<sup>(35)</sup>

ネルソン自身も、松崎中佐の綿密な調査に基づいて、無実の罪に問われた戦犯の助命嘆願に心血を注いだ。まず、フィリピンの法廷に嘆願書をだしたが、これは1949年9月3日の *Manila Evening News* の一面を飾るニュースとなった。さらにネルソンは、ロハス大統領の急逝を受けて、1948年4月に大統領に就任したエルピディオ・キリノ大統領にも、機会をとらえて直訴した。まず戦後の混乱したフィリピンで民主主義に基づく統治を開始したことを祝い、フィリピンが日本人戦犯に対して、キリスト教精神に基づき、寛大な措置をとれば、このアジア地域での唯一のキリスト国として、よい証をたてられるという議論を呈した。その上で、自分がバプテスマを受けた14人の無実を請け合った。しかし、フィリピンでの戦犯裁判における助命嘆願の効果は芳しくなく、ネルソンは、日本人戦犯14人の死刑に立ち会うことになった。夜明け前に、不気味な音をたてて降りる絞首刑台に上っていく一人一人にネルソンは別れの言葉をかけた。「お休みなさい。明日、またお目にかかりましょう。』<sup>(36)</sup>

パターン「死の行進」が若きカストロ軍法務総監の戦争体験であったのに対し、キリノ大統領のそれは、日本軍のマニラ攻撃の際に、最愛の妻と子供たちの惨殺死体を眼前にするというものであった。しかしキリノ大統領は、独立新生国フィリピンの将来を考え、北からの共産勢力の

南下に対抗するためにも、地理上の隣国である日本と、将来は産業貿易を通して交流していくべき立場にあることを考慮し、「仲介者である神の存在への信仰により」心の葛藤を乗り越え、後1953年には、日本との国交樹立前にも関わらず、100名を超える戦犯に大胆な恩赦を実行した。<sup>(37)</sup>

## 帰還したもと戦犯 市村勲大尉の場合

絞首刑が恩赦により減刑され、日本への帰国が許された死刑囚に、1949年にA. N. ネルソンからバプテスマを受けた元陸軍大尉の市村勲がいた。フィリピンの独房で、A5版のノートいっぱいに鉛筆書きで記した短歌は950首を数え、フィリピン収監中にも、義姉を通じて、アララギ派の同人誌『アララギ』に短歌を発表していた。

ひと月の郵便局ストライキの後に届く アララギ四月号にわが一首あり

(昭和27年 アララギ8月号 八月集其二)

『アララギ』に投稿した短歌は、1952年3月から翌53年9月まで計47首に上り、2008年の『大衆文芸』新年号に「モンテンルバ戦犯死刑囚と短歌雑誌『アララギ』」として掲載された。<sup>(38)</sup>

我の亡きあとは海原とびゆきて故郷の母にうたへこの鳥

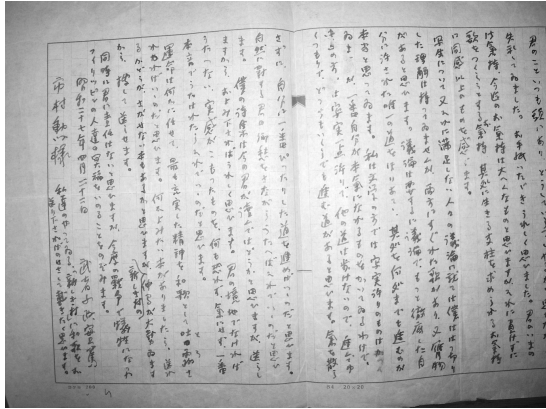
絞首刑の宣告を受けた死刑囚の気持ちが淡々と歌われている。母親のもとに自分の死を知らせてほしい心を鳥に託し、「とびゆき」と表現し、その心が、動的に目にみえるような歌であると思う。

戦犯としての思いが重く心にのしかかる監房内の市村に、その辺を思いやる武者小路実篤の言葉が、市村夫人所蔵の未刊の書簡に残されている。

<武者小路実篤の手紙>

君のこいつも頭にあり、どうしていらっしゃるかと思ひながら失礼して

## 戦いを超えて



武者小路実篤の市村勲への手紙

みました。お手紙いただきうれしく思ひました。君のいまの御気持、今迄のお気持ちは大へんなものと思ひますが、それに負けずに歌をつくらうとするお気持ち、其処に生きる支柱を求められるお気持ちに同感以上のものを感じます。

写生について又それに満足しない人々の議論については、僕ははっ切りした理解は持つてゐませんが、両方にすぐれた歌があり、また（解読不可）物があると思ひます。議論は要するに議論で、もっと徹底した自分に許された唯一の道を掘りあてて、其処を何処までも進むのが本当と思つてゐます。

。。。君の境地でなければうたへない、実感がこもったものを、何も恐れず、気にせず、一番本音でうたはれたらそれでいいのだと思ひます。

運命は何か任せて、最も充実した精神を和歌として吐露されればいいのだと思ひます。。。

同時に君に責任はないと思ひますが、今度の戦争で犠牲になったフィリピンの人達の冥福をいのることを望みます。

昭和二十七年四月二十二日

武者小路実篤

写實的、生活密着型の歌風をもつアララギ派の同人誌に短歌を投稿してきた市村が、文学的には、アララギ派と対比されることもある、自由主義的、理想主義的な白樺派の中心人物武者小路実篤とも交流をもち、作歌について相談をしていたことを示唆する、武者小路からの返書である。武者小路の心からの激励を真摯に伝えている手紙で、市村には、大きな励ましと有益な指針になったと思われる。フィリピンの犠牲者に心を馳せて、何気なく書かれた最後の一行は、市村には重い言葉ではなかったかと思われる。

NARAに保存された裁判記録によると、市村は、歩兵第17連隊の藤兵団第二大隊長として、第17連隊長藤重正<sup>まさとし</sup>従から下記の討伐命令を受けている。

藤兵団命令

1. 兵団ハ通匪者ヲ徹底的ニ討伐肅清シ主要建物道路網〔網〕等ヲ破壊シ以テ作戦地域内ヲ清掃シ敵の上陸ニ備ヘントス。
2. 第二大隊ハ「バウアン」「バタンガス」「タール」「クエンカ」町周辺ノ匪賊ヲ徹底的に討伐スベシ。特ニ敵ヲシテ部落建物等ヲ使用セシメザル事ヲ期スベシ。
3. 細部ニ関シテハ参謀長ヲシテ指示セシム

兵団長

右〔上〕ハ藤重兵団長ヨリ第二大隊長宛に送ラレシ討伐ニ関スル最後ノ印刷命令ナル事ヲ証明ス

大尉 市村 勲<sup>(39)</sup>

これは地域住民一掃の命令であった。「反日住民の肅清」という命令であるが、後にフィリピンの軍法会議で尋問されるごとく、何を基準に「反日かそうでないかを判断するのか」その規準は示されていない。結局、当時の地域住民は皆反日だという論理で、日本軍による民間人虐殺が多く地域で行われた。市村は当時病氣をしており、自分で手は下

していないが、度重なる文書と電話での上官の命令に従い、それを部下に命令し、実行後の報告を受けている。従って、戦犯となった。市村は、フィリピンの法廷に、日本軍のとった作戦等に関しても詳細な情報を提供しており、保存されている市村の裁判記録は、フィリピン政府による軍事法廷での裁きが綿密に行われたことを示している。

後に、キリノ大統領の恩赦により日本に帰還した市村は、一時期東京衛生病院で働く宣教医たちのために日本語を教えた。リチャード・ネルソンは、戦後、米国で医師の資格を取得し、宣教医師として来日し、東京衛生病院で医療に従事した。日本生まれのリチャードは、日本語の会話は自由にできたが、医学の専門用語がわからなかったために、日本語の個人教師として市村に日本語を習っていた。1959年の来日早々、市村に、「医師の国家試験を受けたらどうですか」と勧められて、それを受けてみたという。試験には見事に合格し、東洋人以外の外国人として、初めての日本国医師国家試験合格者となった。それにより、医療行為の枠が広がった。後に、市村は、日本三育学院カレッジで、日本文学の講師として教鞭をとった。

## ネルソンの漢英辞典

ネルソンの漢英辞典はエドウィン・ライシャワー博士の出版の勧めにより産声をあげた。東京衛生病院に勤務していたリチャード・ネルソンは、外科医であったが、当時は医師が不足していたために、産婦人科や整形外科、内科も担当する「よろずや」だったと自分で言う。ライシャワー夫人も患者の一人だった。ある日、夫人に付き添って、ライシャワー博士も病院を訪れた。その時、A. N. ネルソンとの談話の中で、ライシャワーは漢字辞典を出版するよう強く勧めた。リチャードによると、それまでも、父親はいつも漢字カードを手にして漢字を学び、習得

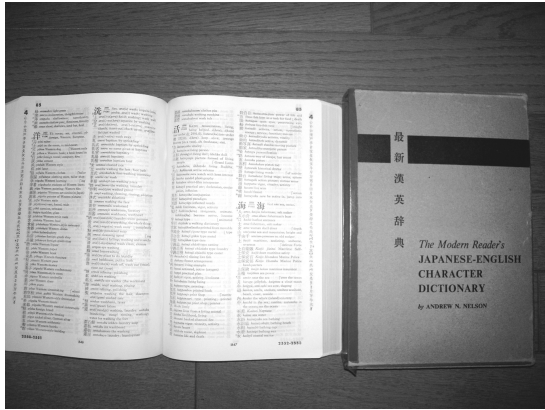


しようとしていたが、父の頭の中に、辞書の出版というアイデアが具体的に湧いたのは、その時だったという。

筆者がこの辞書について知ったのは、オックスフォード大学で日本語教育に従事していた時だった。1990年の赴任直後、ある中国学の教授の口を通して、『ネルソンの最新漢英辞典』が、スタンダードな漢字学習の辞典として、中国学や日本学を専攻する人の座右の書になっていることを知った。しかし、それが宣教師ネルソンの辞典であることを知ったのは、数年後の一人の学部生の指摘によった。ある授業の後で、その学生は言った。「先生、この辞書は、セブンスデー・アドベンチストの宣教師が編纂したと書いてありますが、ご存知でしたか。」

ネルソンの漢英辞典は、使い手にやさしい。実に役立つ効果的なアプローチをとっている。正式な部首索引でひくことができ、一つ一つの漢字に例が沢山設けてある。たとえば、[一]の項には、一を含む例や熟語が7ページにも亘り掲載され、1頁には平均100項目載っているから、総数で、[一]の字には、700弱の漢字や熟語が載っていることになる。非常に見やすく、使いやすい。その割には、熟語の数の多さに萎縮させないのである。

優れた辞書の編纂や聖書の和訳作業には、その蔭に能力に恵まれた日本人補佐の存在がある。ヘボンの『和英語林集成』（初版）には、岸田吟香がいた。ネイザン・ブラウン（Nathan Brown）の聖書和訳には、川勝鉄也がいた。フルベッキの詩篇の和訳には、正式な協力者として植村正久、松山高吉の貢献があった。ニコライの新約聖書の和訳には、中井木菟麿がいた。そして、ネルソンの漢英辞典にも、蔭に多くの日本人の存在があった。<sup>(40)</sup>中でもフィリピンのNew Billibid Prizonから助けだされた市村勲の助力は今回、市村昭子夫人への取材を通して確認された。「主人は、ネルソン先生へ恩義を感じていたのだと思います。それで、ずっと辞書の編纂のお手伝いをしていました」という昭子夫人の証



ネルソンの漢英辞典

言と、辞書の校正について市村に宛てたネルソンの手紙がある。<sup>(41)</sup>

### 教育ビジョンの具現—ミンダナオ島の Mountain View College (MVC)

リチャードに「父上はどんな人でしたか」と質問すると、「Godly な人」即ち「神を敬う」「信心深い」「神に献身した」人との答えが返ってきた。朝早く、書斎の机の引き出しに手をおき、膝まづいて祈っている姿をリチャードは日常的に目にしてきた。息子のリチャードは、父親のアンドリューが怒ったところを見た事がないという。また、人の悪口を聞いたことがないともいう。神を第一とし、神により頼み、神のみこころを行おうと常に神の導きを求める「神に献身した」人という意味で、「Godly」だったのだと思われる。

アンドリュー・ネルソンが実に多様な働きを次々にこなして、言葉の真の意味で「常人離れした」活躍を遂げたのには、一つには、この神の御心を求めるという信仰者としての姿勢があると思われる。神の意図に

添うと思えば、それを遂行するという決断においては、いたずらに迷うことはない。アンドリューは、神への祈りを通して確信をえたことの実施にあたっては、組織的に対処した。来日初期に日常生活の指針として21か条の方針を自らたて、1953年には新たに人生の方針を立てている。

アンドリュー・ネルソンの生活は“Ordered Life”そのものであった。宣教師が過ごす野尻湖でも、毎日辞書の作成に没頭していたアンドリューは毎時間ごとに、5分間の休憩をとり、運動のために栈橋の端まで歩いていき、戻ってきたという。55分は集中して仕事をし、5分間は、運動のために歩いていた。<sup>(42)</sup>

1950年にアンドリューはミンダナオのBukidnonへ行き、そこに自らの教育理念を実現するカレッジを設立する場所を見出す。海拔2000メートルの高所にあるその土地には、11の滝があり、その一つは、36メートルの高さで、水力発電に理想的だった。見渡せば、幾重にも連なる平らな地があり、水はきれいで、農業に向いていた。そこに1958年に、Mountain View Collegeを創立した。筆者がそこを訪れた1980年ごろは、そのカレッジはよく整備され、学生たちは小さな石を運び、水力発電で電気を起こし、薄暗くはあったが、電燈の下で、夕食を食べ、夜の学びをしていた。小型飛行機から見ると、カレッジの周囲には、フィリピンマホガニーのプランテーションが広がり、野生の蘭の生育する森がある。学生たちの眼は人なつこく、輝いていた。ある安息日の午後、或るグループの学生たちの案内で、ある滝壺に連れて行かれた。そこで、ネルソンが、その地に、どのようにしてカレッジを建てたのかを、学生は話してくれた。

それは「ある夜、日本にいたA. N. ネルソンが夢で、『フィリピンへ行きなさい。ミンダナオに行きなさい。Bukidnonへ行きなさい』という声を聞き、ある滝を見せられた。夢に従って、ミンダナオに行き、Bukidnonに来てみると、夢でみたのと同じ滝があった。それが今、私

たちが見ているこの滝です」というのであった。「そして、ネルソン先生は、この場所にカレッジを立てたのだ」と。

この話を、筆者は長年半信半疑できいていた。事実なのか、それとも伝説なのかと。今回、思い切って、リチャードに尋ねると「私も聞いたことがあります」と、アンドリューがリチャードに語った、実際に夢であった話であることを証言してくれた。

とすると、このミンダナオの地に、ネルソンが実現しようとしていた教育の理念にかなうカレッジを建てるようにという意図は神から来たものであったということになる。筆者が訪ねた1980年代初頭には、少なくとも、カレッジ、及びその周りでは平和な、緑に囲まれる環境の中で、学生が勉学にも、労作教育にも励んでおり、安息日には、カレッジの周囲に100を越す数の集会所が開かれ、学生たちは徒歩で、あるいは、川を泳いで越えて行き、神の言を、ある所では、方言のために、3重、4重に通訳しながら、現地の言葉で伝えていた。牧師はカレッジに一人しかいなかった。

このミンダナオ島が、かつては日本軍とフィリピン軍の熾烈な戦闘の場であり、当時の日本軍の一部による残虐な行為が行われたことは、筆者は、最近になって知った。日本軍の兵士が、食料不足で餓死しそうになった時に、フィリピン人の捕虜を殺して、人肉を食したという。その責任者が、戦犯として裁かれたのだ。

それは、ネルソンの建てたMountain View Collegeを通して見えるミンダナオの風景からは、到底想像を絶する出来事であり、このカレッジの平和みなぎる雰囲気には、そのような過去があったことすら、一抹も感じさせない。ネルソンたちが、理想的な教育—即ち知的教育と労作教育とをバランスよく組み合わせて、霊的にも成長する場を与える環境を探し求めている時に、Bukidnonへ案内したフィリピン人は、戦時中の日本軍のミンダナオ侵攻時に、高所にあり、他から隔離されている

ようなこの地に避難して無事に過ごしたのを思い出して、ここに案内したのだという。

日本軍とのあの血なまぐさい戦いの場であったからこそ、罪の無い人の血が暴虐により流された地であるからこそ、アンドリュー・ネルソンは、夢の中で、聞いたのではなかったか。「フィリピンへ行きなさい。ミンダナオに行きなさい。Bukidnonへ行きなさい」という神の声を。そして、その夢で見せられた滝を、この地で見出し、そこに神の言を学び、実践するための教育機関、Mountain View Collegeを建てたのではなかったか。

アンドリューがその夢でフィリピンへと導かれたのは、いつであったか、リチャードもはっきり覚えていないという。でも、それは、フィリピンへ来る前のことであったに違いないから、1946年にSCAP/GHQの仕事を引きつた前後ではなかったかと思われる。ネルソンがPUCの復興に召請されてフィリピンに到着した1947年初頭は、フィリピン軍事法廷でのBC級日本戦犯裁判が始まる半年前で、当初のアンドリューの計画にはなかった日本戦犯への監獄伝道を行うには絶妙なタイミングであった。

## 苦難の超え方

A. N. ネルソンの生涯と働きは、牧師—教育者—辞書編集者—連合国軍最高司令官総司令部 民間情報教育局 宗教調査アナリスト—日本戦犯の教誨師—教育者—辞書編纂者と実に多岐にわたった。

これだけ紆余曲折のある人生を経て、アンドリュー・ネルソンの内心には、ある時は葛藤や苦悶、それを超えるための人知れず多大な努力があったのではないだろうか。リチャードに尋ねてみた。ちょっと考える間をとって、彼は言った。「一本道じゃなかったでしょうか。」アンド

リューは、いつも神への祈りと瞑想のうちに、神のみこころを求め、人生の道を決断し、一旦、決断したら、その道を一筋に進んだのではなかったか。来日初期に決めた21条からなる生活の指針には、「11. 多くのことを短時間にこなすためには、効率的でなくてはならず、神経エネルギーを無駄遣いしてはならない。12. 他人に誤ったことをした時には最初の機会にそれを正し、その後は、過去は過去で、心配は、現在と未来の事柄にしなければならない」が含まれている。決断にそった実行には、この実際の指針が役にたったのであろう。神に導きを求め、それを得たなら、一筋に進む、であるから、リチャードの「一本道」という表現があるのであろう。人生の各段階で実際になしえたことは地理的にも、心理的にも、分野においても多岐にわたった。しかし、その原点は、いつも同じ、「神への祈りの中で感得する神のみこころ」であったと思う。であるから、その原点は決してブレなかった。従って、アンドリューは、チャレンジにも翻弄されることはなかったのである。MVC創立後に、マニラのPUCとミンダナオのMVCの両校の学長に就くよう推薦され、それを受けて休暇に発ったその留守に反対意見が起こり、この計画が流された。その時には、「背中を刺された」思いをしたアンドリューであったが、1953年にたてた生活方針に戻り、その苦悩を克服した。

1. バラエティーを求めよ。
2. 一言一行に誠実であれ。
3. 冷静さを常に保ち、苛立ってはいけない。
4. 今、それをしなさい。未来の時間はそれを進歩させるのに用いよ。
5. 最も短時間に事を片付けよ。
6. インスピレーションは、過去にではなく、現在と将来に求めよ。
7. 過去の事を忘れ、今に集中せよ。
8. 大胆さをもって事を実行せよ。

9. 良い事のみを行え。
10. 秘密にしておくと言った言葉は絶対にもらすな。
11. 決して落ち込むな。それは愚かしい。<sup>(43)</sup>

## 結びにかえて

本研究で下記が明らかになった。

アンドリュー・ネルソンは、連合国軍最高司令官総司令部（SCAP/GHQ）において、民間情報教育局（CIE）宗教課のスタッフとして、主に、下記の二つの働きに携わった。その第一は、ウィリアム K. バンス宗教課長を補佐して信教の自由に関する指令の文面作成に参画したこと。これは、既に、Andrew N. Nelson Storyと副題のついているネルソンの伝記に記されている事であるが、今回、米国国立公文書館で見つかったCIE作成と思われるSCAPから日本政府宛に出される指令（Directives）の草案と見られる文面に、William K. Bunceの頭文字の署名のある変更事項の書き込みのある文書により、その記述の裏付けがなされた。

GHQ・CIEでのネルソンの仕事の第二は、民間情報教育局宗教課の宗教調査班（Religion Research Unit）の責任者として、弾圧を受けた宗教団体のフィールド調査を実施したことである。これもNARAに保存されたSCAP/GHQのReligion Research UnitのSpecial Reportに明らかである。セブンスデー・アドベンチスト教会に対する迫害の報告が1946年2月16日付けで、Subject: Persecution of the Seventh-Day Adventist Churchesとして提出されているが、この詳細に関しては、キリスト教史学第69集に掲載予定の拙稿を参照いただきたいと思う。

ネルソンは、戦時中に弾圧を受けて、4人の犠牲者をだした日本SDA教会の宣教師であった。所属教会を通して被弾圧者経験のあるネルソン

が、連合国軍最高司令官総司令部民間情報教育局宗教課の宗教調査班の責任者として、宗教調査に臨んだこと、更に信教の自由に関する指令の文面作成にバンス宗教課長を補佐して携わったことの意義は大きい。

フィリピンのニュービリビッド刑務所に収容された日本人戦犯になされたネルソンの監獄伝道により新生のバプテスマを受けた戦犯死刑囚の中に、市村勲元大尉がいたが、監獄にあって950首の短歌を作成したことが、市村昭子夫人提供のノートにより明らかになった。また、監獄においても作歌を志す市村を励ます武者小路実篤からの直筆の書簡も紹介された。更にNARAに保存された裁判記録の中に、戦時中の日本軍によるフィリピン民間人粛清の命令も見出された。

アンドリュー N. ネルソンは、戦前、戦時中、戦後の日本で、アメリカで、アジアで、様々な場面で、神に用いられる宣教師であった。どこにあって、神の意図を求め、具体的に祈り、それを、即、実践する働きであったからこそ、神はさまざまな場面で、ネルソンを用いられたのだと思われる。

## 註

(1) 日本セブンスデー・アドベンチスト教会の正式名称は、下記のように変更されるが、本稿では、煩雑を避けるために、日本SDA教会と記述する。

1907年 第七日安息日基督再臨教団日本連合伝道部会

1917年 第七日安息日基督再臨教会日本年会

1919年 第七日安息日基督再臨教団日本連合伝道部会

1941年 第七日基督再臨団

1942年 第七日基督教会

1951年 セブンスデー・アドベンチスト日本連合伝道部会

(2) 夏目漱石『それから』下巻、角川文庫、1953年、90頁。



- (3) 井上清『日本の歴史』下巻, 岩波新書, 1966年, 111-12頁。
- (4) 「洋館と外国人」『新天沼・杉五物がたり 付 萩窪物語』杉並第五小学校創立七十周年記念事業実行委員会刊, 1996年, 51-52頁。
- (5) 前掲, 311-312頁。
- (6) Minchin-Comm, Dorothy and Nelson-Oster, Dorothy, *An Ordered Life – The Andrew N. Nelson Story* (New York: Trafford Publishers, 2010), p.33.
- (7) 各務敬「涙の谷を過ぎるとき」『学校が兵舎になったとき』千葉県歴史教育者協議会, 青木書店, 1996年, 95頁。
- (8) 歴史背景の描写に関して, 本稿は, 井上清著『日本の歴史』下巻(岩波新書, 1966年)に負うところが大きい。
- (9) *An Ordered Life*, 84-85頁。
- (10) 外務省編『終戦史録』I 北洋社, 1977年, 112-115頁。下村海南『終戦秘史』講談社学術文庫, 1985年, 51頁。
- (11) 前掲, 106-108頁。
- (12) SCAP/GHQ資料。X/G20. Religions Unit Memo. 28 January 1946. Subject: Seventh-Day Adventist Persecutions – Georg Dietrice. (Declassified. Authority 77517.)
- (13) しかし, 政府は, 没収した財産のうちから, 投獄した教団職員の給料は留守家族に支払った。
- (14) 阿部美哉「国家神道解体のプロセスー訳者まえがき」, William P. Woodard, *The Allied Occupation of Japan, 1945-1952 and Japanese Religions* (Netherlands: E. J. Brill, 1972), trans. Abe, Yoshiya, 『天皇と神道』(サイマル出版会, 1988), 4頁。
- (15) General Headquarters Supreme Commander for the Allied Powers/APO 500/Memorandum For: Japanese Government/Subject: Freedom of Religion and the Separation of Religion and State./AG ( ) CIE, SCAPIN)
- (16) 『天皇と神道』24頁。
- (17) *An Ordered Life*, 89頁。
- (18) 『天皇と神道』22頁。
- (19) 前掲, 20頁。

- (20) General Headquarters/Supreme Commander for the Allied Forces/  
APO 500/AG ( ) CIE/Memorandum for: Japanese Government/  
Subject: Freedom of Religion and the Separation of Religion and State.  
(Declassified/AuthorityNND775017).  
“This directive supersedes the following directives: AG 000.3 (15 Dec.  
1945), SCAPIN 448; AG311.14 (13 May 46) CIE, SCAPIN 947; AG 000.3 (6  
Nov. 46) CIE SCAPIN 1316; and AG 602 (13 Nov 46) CIE, SCAPIN  
1334.” という前書きがある。
- (21) *An Ordered Life*, 87頁。
- (22) 前掲。『天皇と神道』280-82頁。
- (23) 日本への入国手続きを行った宣教師の数」前掲, 259頁。
- (24) 森本あんり『現代に語りかけるキリスト教』(団出版局, 1998年) 15  
頁。
- (25) 米国改革派教会のJ. Ferrisに宛てたフルベッキの1868年1月17日付の  
書簡。
- (26) Xie, Zhihai, PhD Thesis, The Christian Boom in Occupied Japan and  
US-Japanese Relations under Occupation (1945-1952), 2010, p.7.
- (27) 『ホーリネス・バンドの軌跡』ホーリネス・バンド昭和キリスト教弾圧  
史料行会, 1983年462頁。
- (28) 梶山積『使命に燃えてー日本セブンスデー・アドベンチスト教会史』  
福音社, 1982年, 446頁。
- (29) *An Ordered Life*, 86頁。(筆者和訳)
- (30) 前掲。Appendix II, 137頁。
- (31) 永井均『フィリピンBC級戦犯裁判』講談社, 2013年, 143頁。
- (32) 前掲, 60頁。
- (33) 前掲, 92頁。
- (34) 前掲, 45頁。
- (35) *An Ordered Life*, Appendix III, p.138.
- (36) 前掲, 104-105頁。永井, 144頁。ネルソンのこの挨拶の言葉は, 無実  
の罪で処刑されたクリスチャンの中村秀一大尉が処刑台に消える前に,  
にっこり笑って言った言葉として知られている。
- (37) 前掲, 179-182頁。

- (38) 『大衆文芸』 第68巻第1号（2008年新年号）10-13頁。
- (39) フィリピン日本人BC級戦犯に関する資料。NARA, Trial Record, Record identification: FRC 1906 (Rg No. 331, Stack area 290, Row 12, Compartment 34, Shelf 4). Declassified. 775011.
- (40) 多くの宣教師に日本語を教えた早坂文子など（早坂文子の子息であり、現東京衛生病院理事長の早坂轍医師の証言2014年12月7日）。
- (41) 筆者の取材に応じて（2013年9月19日）。レバノン、ベイルートの Middle East College 滞在中のネルソンから市村に宛てた1961年5月2日付の手紙。
- (42) A. ネルソンの同僚ルイス・ベンデン宣教師の証言（2013年8月）。
- (43) *An Ordered Life*, 111頁。